

新卒移住に向けた「観光×インターン」の受け入れ体制の構築

静岡文化芸術大学 デザイン学部 黒田ゼミ（研究室）

指導教員：教授 黒田宏治

参加学生：吉川有紀、松浦あづみ

1 要約

静岡県榛原郡川根本町は、大井川上流部に位置し町の90%以上が森林という山あいの町である。「最も美しい村連合」に加入しており、大井川沿いに広がる茶園景観などの豊かな自然風景、SLや吊り橋などの観光コンテンツにあふれた町である。しかし、高齢化率が50%を超え、少子高齢化や過疎化、産業の担い手不足が問題となっている。

そこで、自分たちのような、田舎や地域活性化に興味を持っている学生と川根本町を結びつけ、長期的関係人口や移住者を作るための施策の第一段階である、「長期的関係人口を作る」ための「川根人体験」を行うとともに、自分達が次の段階である「泊まり込みインターンシップ」を体験し、それらの実体験と、地域の人と築いたつながりから下地作りを行った。

2 研究の目的

第一段階の川根人体験においては「川根本町の関係人口を増やす」ことを目的とし、その後の長期的目標として「川根本町の移住者増加」を狙い、そのための下地作りをすることを目的とする。

3 研究の内容

本大学の学生を対象に、田舎体験ツアー「川根人体験～山里で生きる」を実施。毎回テーマを決め、現地の人々と交流しながら川根本町での生活や仕事を体験してもらう。このツアーによって若者が川根本町に興味を持ち、再来するきっかけを作る。さらに、田舎で生きる人々の生活に触れてもらうことで、将来を考える転機にいる大学生に生き方の選択肢を広げてもらうことも狙いである。

また、本ゼミ生の吉川と松浦が、川根本町にて泊まり込みのインターンシップを実施。自分たちという前例を作ることで、外から人を受け入れる体制作りを図る。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

短期体験研修の「①川根スタディーツアー」、泊まり込みのインターンシップの「②川根人体験」、移住・就業サポート「③もう川根人」3ステップのプランで計画。4年サイクルで大学生の新卒移住の流れを作る。

(2) 実際の内容

目的を「新卒移住」ではなく、ターゲットを広く取り「若者の関係人口を増やす」に変更。すでに町や民間で移住に関するサポートが行われていることより、「③もう川根人」は中止。まずは川根本町に興味を持ってもらうきっかけづくりの役割を担うことにした。「①川根スタディーツアー」の名称を「川根人体験～山里で生きる～」に変更し、現地の人と関わり、田舎を体験することで若者の再来を狙うツアーとして開催した。

また泊まり込みインターンシップ「②川根人体験」は、川根本町でインターンシップの体制が整っていないことより、まずはそれぞれ泊まり込みインターンシップを実践。自分たちが前例となって人を受け入れやすくする下地作りを行った。

(3)実績・成果と課題

●「川根人体験～山里で生きる～」の実施

・第一回 稲刈り体験&移住者交流ツアー

川根本町のUターン生の丹羽亮介さんを講師とした稲作体験ツアー。コロナウイルスの影響により、学校での大々的な広報は不可により、企画者個人の呼びかけから2名の学生と、川根本町役場企画課の方3名が参加した。スケジュールとしては、午前中に昔ながらの手刈りで稲を刈り、竹林から竹を切り出し、稲束を作る体験をして、稲結びをした稲を干した。

昼食後は川根本町を観光し、その後地元の移住者の方々と交流会を開催した。交流会では、移住者が移住した理由や、移住して楽しかったこと、川根本町の魅力などを話し、川根本町の可能性や魅力を伝えた。ツアー後に学生参加者に実施したアンケートでは、「交流会で地域の人たちの温かさが伝わった。」「地域の人たちのライフスタイルや考え方を聞いて、将来の選択肢が広がった。」「川根本町がやりたいことをやれるような環境が整っていると感じた。」「将来田舎に移住するなら川根本町に行きたい。」というような意見が上がった。



・第二回 猟師さんと山歩きツアー

現地の猟師、殿岡邦吉さんを講師とした狩猟体験ツアー。大学のポータルサイト、またポスター掲示によって広報し、4名の学生が参加。第1回目では、1日に工程を詰め込みタイトなスケジュールになってしまったことより、今回は前日にオンライン事前講座を実施。

当日は実際に現地を訪れ、山をハイキングしながら野生動物の痕跡探しや、山の歩き方、山の生活など様々な話を聞いた。昼食は地元で経営しているカフェの、シカ肉を使ったジビエ弁当を実食。その後わなの設置体験や、わなの見回りに同行した。夕方には猟の未来について話し合う交流会を開催し、町内で様々な活動を行う4名の移住者の方が参加した。ジビエ文化の拡大やシカの角や革を使った商品開発、新しい仕組みづくりなどの猟の話題だけでなく、耕作放棄地の問題を利用した番茶の話など、地域課題を踏まえた様々な話題が飛び交った。

ツアー終了後に実施したアンケートで、ツアー参加後の猟師やジビエの印象の変化の質問では、全体的に「猟師とは思ったより身近な存在ではあるが、様々な問題の現状を実感できた。」また「ジビエへの印象が良くなった」という声が上がった。全体の感想では、「川根本町や猟に対する興味を深めるだけでなく、将来のことやどんな自分になりたいかを考えることができた」という声が多数上げられ、将来の選択肢を広げることができたのではないかと考える。



●川根本町での泊まり込みインターン 吉川

川根本町にサテライトオフィスを置く「株式会社経営参謀」の住み込みインターンに参加し、川根本町で生活をしながら、インターンに参加した。インターンでは、行政と一緒に観光客の分析と、観光コースの作成、ワーケーションモニターツアーの企画などを行った。特に一貫して関わったのは、飲食店経営である。飲食店経営では「CRAFT TEA」という店を経営し、川根茶をはじめとする全国の高品質なお茶を厳選して販売した。お店の開店準備として、家具選びや店舗の設備設置、SNSを活用した広報などを行った。

インターンの中でお店の開店準備をするとともに、地域に入り込むために様々な地域の活動に参加した。なぜなら店舗では町からの補助金をもらっているため、町民からの理解を得るためにも地域に歩み寄ることが重要であるからだ。地域活動の参加も重点を置いて活動した。地域活動として、駅前を考える会の会長に就任し、毎月の清掃活動や駅前ライブなどを企画した。また、地域の伝統芸能である「赤石太鼓」や「敬満大井神社神楽会」などの練習会への参加、地域の山の整備をするプロジェクトなどに参加して地域の人と交流した。地域の人との交流の中で、生活するうえでのコミュニティ作りも行った。



●川根本町での泊まり込みインターン 松浦

川根本町と浜松市の2拠点生活を送りながら、町内の3か所でインターンシップを実施した。「NPO法人かわね来風」では放課後児童クラブの手伝いや、空き家片付け、キャンプ場の受付、ゆず商品の梱包作業などを手伝った。4月から10月までの期間、月に6か程出勤。働きながら空き家問題の実態や「ゆず」という新しい特産品開発について知った。理事である浜谷さんには、マルチワーカーが多い川根本町での働き方について教えてもらった。

「農業法人Agrinos」では、耕作放棄地を利用してゆずの栽培や商品開発を行う。月に1, 2回、計6回農作業などのお手伝いをした。最終日には活動をブログとしてまとめる。農園の耕作放棄地の利用の大変さに触れつつ、山里のビジネスの可能性について考えた。

また、現地の猟師さんに師事して猟を教えてもらい、猟師を目指している。少しずつ猟師としての経験を重ねながら、事例分析を進めて猟ビジネスの開業を目指している。



(4) 今後の改善点や対策

●「川根人体験～山里で生きる～」の実施

第一回では、講師となる人の生活やライフスタイルを体験中にもっと見える形を考える。作業の前に、説明の時間を設けるなどの工夫が欲しかった。また、コロナウイルス感染症の影響もあるが、参加者募集方法の再検討や、飲食を含めた交流なども行えるよう整備していきたい。

第二回目では、猟について十分深められた一方で、川根本町自体に焦点を当てた要素が少なかったことが挙げられた。また交流会では、課題を話し合うのか、交流のためにお話を伺うのか、目的がどちらかはっきりさせるべきであった。

次回から、参加者負担となるが、学生や若者に負担があまり大きくならないような、ボラバイトや民泊などのやり方の検討が課題となる。

●川根本町での泊まり込みインターン 吉川

地域の人のために何かやるためには、それに見合う分の収入がなければ継続していくことが難しくなる。そのために、地域の産業を壊さないように、地域の人にも事業としてもプラスになる形を考えていく必要がある。また、近所へのあいさつが遅れてしまい、地域の人を不安にさせてしまうことがあった。地域の強固なコミュニティを理解し、適切な対応をしていく必要である。

●川根本町での泊まり込みインターン 松浦

川根本町でインターンシップを進める中で、街中と山里の働き方のギャップを感じた。田舎で働くにおいて、人間関係の構築がとても重要になる。地方に移住しそこで働いていくには、現地の方、また移住者の方の話を聞くことで、ギャップを少しずつ埋めていくことが課題である。

5 課題提出者・地域への提言

地域に若い人を呼び込むためには、「移住希望者」や「関係人口となりうる人」と、地域が交流し、お互いを理解し合う必要がある。そのためのきっかけは、外の人と中の人の交流の場を設けることであると考えられる。そこで地域の暮らしや、地域の課題をありのままに示すことで、そこに魅力を見つけ、関わりを持ちたいと考える若者が増えていく。

川根本町の場合は、「観光地であり、観光客が来るような資源があること」、「自然が豊かなこと」、「地域の人温かいこと」などが、外からの目線から言える魅力であり、「人口減少が進むこと」「観光資源が生かし切れていないこと」「自然の中で暮らすための産業が衰退していること」は町の課題であり、自分達に関わって解決したいと思うことである。

そのようなことを外部に発信していくことで、私たちのような田舎や地域活性化に興味のある若者たちが集まってくると考える。ぜひ、外の人との交流をして、地域のことを発信してほしい。

6 課題提出者・地域からの評価

川根人体験①の協力者の丹羽さんは、「この企画で地域の移住者も含め、学生や役場の方など、色んな人と話せてよかった。学生の選択肢が広がって、地域に呼び込めたら地域も盛り上がると思う。地域や若者のために協力できることがあればまたしたい。」とおっしゃっていた。川根人体験②の協力者の殿岡さんは、猟の問題を知ってもらい、問題解決のために若い子たちが興味を持ってくれたり、関わったりしてくれるきっかけになったら嬉しいとおっしゃっていた。交流会に参加した地域の方々からは、「学生などの若い人たちの意見が聞ける機会があって面白かった。」「地域の人との交流や若者の意見から、地域の問題や魅力の再発見の機会ができた。」「次もやるならまた参加したいので是非よんで下さい。」とのご意見をいただいた。

役場の方々からは、「地域の人と地域外の若い人たちの交流は意義があることだと思う。若い人たちが川根本町に来てこれからもやってくれるのであれば、町としてできることを協力する。」と協力の意向を示していただいた。